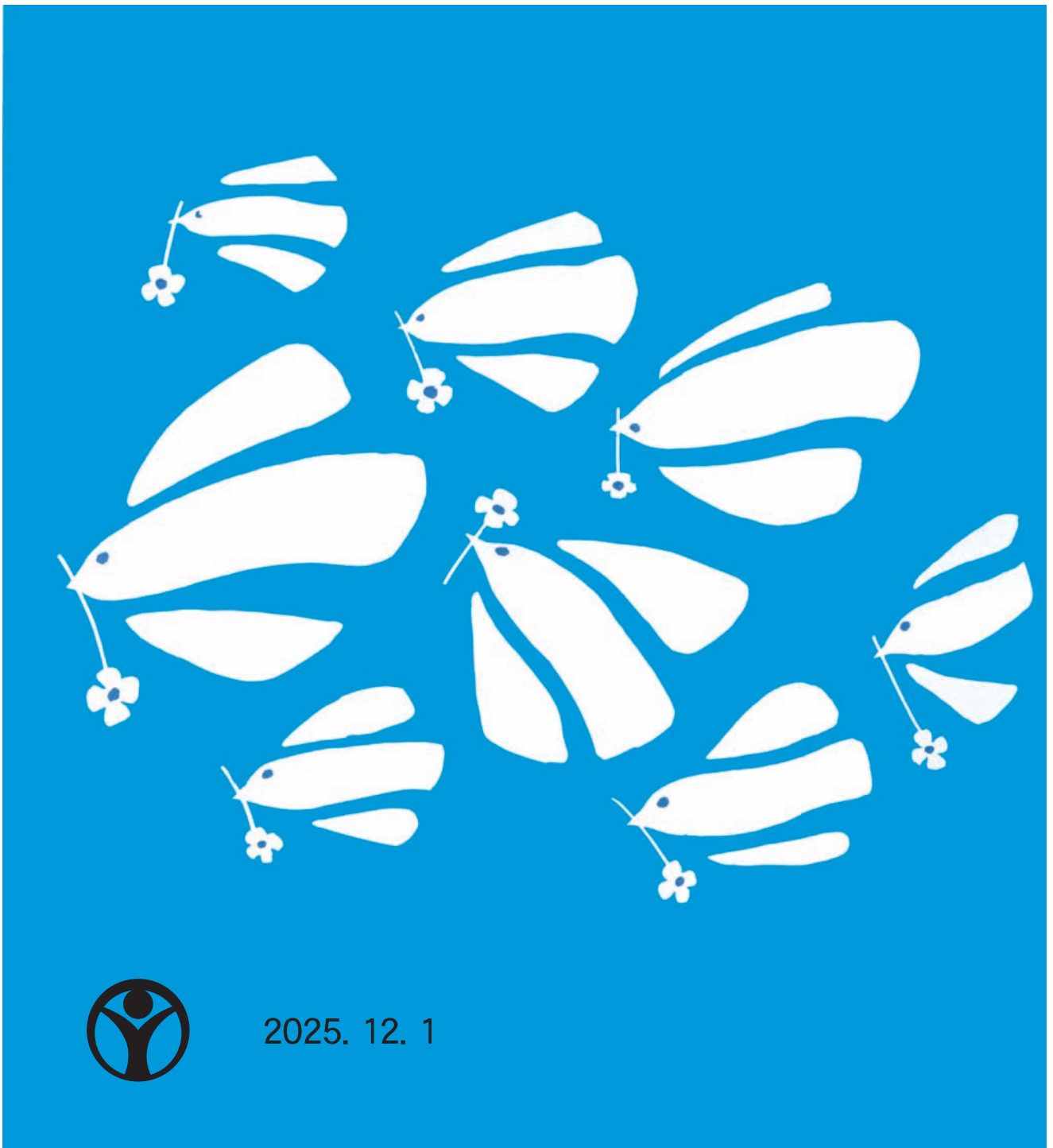




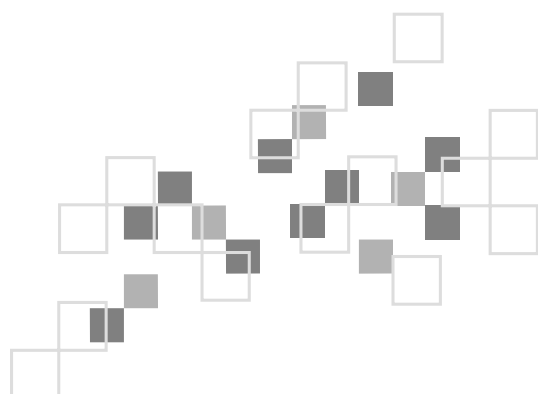
No.85



2025. 12. 1

機関紙「愛知腎臓財団」第85号（令和7年12月号）

1	巻頭言 変化の予兆	3
	公益財団法人愛知腎臓財団 会長 国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 名誉総長 大島 伸一	
2	「厚生労働大臣感謝状」を受賞して	4
	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 第二移植外科部長 鳴海 俊治	
3	「厚生労働大臣感謝状」を受賞して	5
	藤田医科大学ばんだね病院 病院長 堀口 明彦	
4	腎不全患者の緩和ケアに感じること	6
	医療法人人生寿会 五条川リハビリテーション病院 病院長 島野 泰暢	
5	移植施設紹介 シリーズ第16回	7
	日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 第二移植外科部長 鳴海 俊治	
6	透析施設紹介 医療法人静心会おけはざまクリニック	9
	阿久比クリニック	11
7	トピックス	13
8	編集後記	15



発行所 公益財団法人 愛知腎臓財団
発行責任者 専務理事 渡井 至彦
所在地 名古屋市中村区竹橋町36番31号 3階
TEL 052-446-8085
FAX 052-446-8368

URL : <https://www.ai-jinzou.or.jp>
e-mail : (事務) jimu@ai-jinzou.or.jp
(コーディネーター) co@ai-jinzou.or.jp

公益財団法人愛知腎臓財団 会長

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター 名誉総長 大島 伸一



我が国では日本で初めての女性の自民党総裁が誕生したと思ったら、それまでの自民・公明体制が分解し、自民党政権の存亡に関わる政治情況が勃発し大騒動である。政界の変化は、臓器移植にも影響するだろうか。これまで半世紀にわたって移植医療に携わり日本の腎移植医療を推進することに尽力してきた立場から、今回の政権の混乱がどのようにに移植医療に影響するか考えてみたが恐らくは何

さて 政権の動きとは別に今後の臓器の幹
旋業務体制を大きく変える「臓器のあっせん
業の許可等について」という説明会が令和7
年（2025年）9月30日に開かれた。これに
よると全国を数か所のブロックに分け、それ
ぞれのブロック毎に臓器の幹旋業務を進めて
いくというものである。中部地区では厚生労
働省の健康・生活衛生局長自らが藤田学園に
出向き、新しいシステムに変更することと中
部地区の事務所を藤田学園内に置き、今後の
体制の主導的役割を担って欲しいとの依頼が
あったと聞いている。

国はこれまでの臓器幹旋システムを根本から変え新しいシステムの下に組織を抜本的に改変しようと腹を決めたようである。理由は日本での臓器移植、特に死体臓器移植が増加しないことに尽きる。これまでの日本の死体腎提供システムでもっとも実績をあげてきた

私事になるが移植を始めてから今年で55年過ぎた。80歳を超え立派な後期高齢者である。死後の提供臓器数を増やすという当時から抱えてきた問題の解決はまだ先が見えていない。今回の改正がその突破口となることを祈ってやまない。

年齢には勝てないとは昔からよく言われてきた言葉であり、今年傘寿となつた私にはそのまゝ重く響く言葉である。私としては死後に使える臓器があるなら何でも使つてもらつて構わないが、今は先頭に立つて動き回るのは年を取り過ぎており、いわゆる役立たずである。この年になつて停滞している移植医療に大きな波が来たのかも知れない。私の出番はもうないだろうが責任を取るぐらいならまだできそうである。次のそして次の世代の人たちにやりがいいのある活躍の場が来たんだと思う。期待をしたい。

「厚生労働大臣感謝状」を受賞して

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院

第二移植外科部長 鳴海 俊治



この度、臓器移植対策推進功労者として厚生労働大臣感謝状を賜り、大変光栄に存じます。愛知腎臓財団をはじめ、ご推薦くださった皆様、そしてこれまでご指導くださった諸先生方、共に医療に携わってくださった医療従事者の皆様、何よりも尊い決断をされたドナー様とご家族、移植医療を信じてこられたレシピエントの皆様に心より感謝申し上げます。

私の臓器移植への道のりは、1991年弘前大学での生体部分肝移植への参入から始まりました。信州大学で当時本邦11例目の生体肝移植を見学しましたが、より多くの経験を積むため、故佐々木睦男助教授と親交の深い岩城裕一教授（南カリフォルニア大学）のご鞭撻で、1993年から1997年にかけて2

度、UCSF（カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校）移植外科部門へ留学する機会に恵まれました。Nancy Ascher教授の指導のもと臨床フェローとして肝移植、腎移植、脾移植の最先端の知識と手術を習得し、アメリカの臓器移植医療システムやチーム医療のあり方を肌で感じた経験は、私の移植医としてのキャリアにおいてかけがえない財産となりました。

帰国後、弘前大学で肝胆脾外科手術と肝移植に携わり、学生に移植の講義も行いました。2004年に青森県の腎移植がゼロとなる中、弘前大学泌尿器科に着任された大山力教授が2006年に立ち上げた腎移植ユニット（腎臓内科と共同）のコアメンバーとして参加しました。UCSF式のチーム医療を取り入れ、現在までに200例近くの腎移植を積み重ねています。2010年には弘前大学移植先進医学再生講座の准教授を拝命し、鷹揚郷病院や青森県コーディネーターの協力の

もと青森県内で移植の普及啓発活動に携わりました。2012年には生体肝移植後に末期腎不全を併発した患者さんを主治医として名古屋の航空自衛隊のご協力で岡山大学に緊急搬送、本邦初の脳死下肝腎同時移植成功例に参加させていただきました。

その直後名古屋第二赤十字病院の渡井至彦副院長にお声がけいただき、2013年1月に愛知県へ参りました。愛知県は腎移植の件数が多く、高いアクティビティを持つ地域であり、緊張感を持って着任しました。打田和治先生が構築された後どんなに進化してきた当院のチーム医療では泌尿器科、肝胆脾外科、消化器外科、腎臓内科など多岐にわたる専門スタッフが密接に連携し、看護師、薬剤師、臨床検査技師、臨床工学技士、管理栄養士、ソーシャルワーカー、臨床心理士、医療秘書といった多職種チームに支えられ、生体腎移植、献腎移植、脾腎移植に携わらせていただいています。特に献腎・脳死下脾腎移植においては、ドナー様とご家族の尊いご意思を繋ぐ重責を改めて感じ、摘出手術には可能な限り参加しています。県内には臓器提供病院も多く摘出の際には多大なご支援をいただいております。

臓器移植医療は、患者様の人生を変える可能性を秘めた医療ですが、ドナー不足、合併症、社会的な理解不足など、多くの課題があります。これらの課題を乗り越え、より多くの患者様に移植医療の恩恵を届けるために

は、医療従事者だけでなく、社会全体での理解と協力が不可欠です。幸い、当院には全国各地から移植の研鑽に若手が来ております。彼らに私の経験を伝え、移植を一層広めてもらうよう指導することを使命と思っております。

今回の感謝状は、私個人の功績というよりも、これまで私が関わってきた全ての皆様との協働の証であると受け止めております。これからもこの感謝の気持ちを胸に、臓器移植医療のさらなる発展のために尽力していく所存です。貴重な臓器の移植をしっかりと成功させ、長期生着を目指し、命を繋ぐ医療を提供できるよう日々精進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



「厚生労働大臣感謝状」を受賞して



藤田医科大学ばんだね病院

病院長 堀口 明彦

この度は、厚生労働大臣感謝状を頂戴することとなり、誠に光栄に存じます。ご推挙くださいました公益財団法人愛知腎臓財団並びにご関係の皆様にご心より御礼申し上げます。

当院は、一般財団法人坂文種報徳会が名古屋市の中心部の医療救済・社会福祉事業を目的として1930年に「財団法人坂文種報徳會病院」として開院し、1971年に運営が藤田学園に移行した、病床370床を有する病院です。

当院での脳死下臓器提供の始まりは、2021年に遡ります。院内では脳死・臓器移植委員会として以前より活動を行ってまいりましたが、臓器提供事例としては一度もございませんでした。

その為、数名のスタッフを除く関係者のほとんどが、臓器提供事例を未経験である状態での初の脳死下臓器提供となりました。全てが手探りの中、経験のあるスタッフ達を中心としたチームワークと綿密なカンファレンス、そして公益社団法人日本臓器移植ネットワーク様の手厚いサポートのもと、この脳死下臓器提供を完遂することができました。

この脳死下臓器提供を通じて、私たちは臓器提供いただいた患者様のご家族の決意や想いに直接触れることができました。

ご家族から「母の想いを叶えることができてよかった。」「役に立つことができてよかった。」といったお言葉を拝聴した際、「いのちのバトン、想いをつなぐ」という言葉が鮮明に浮かんでまいりました。この臓器提供の先には、それぞれのレシピエントが待っており、この臓器が届く事で、言葉のとおり「いのちのバトンを繋いでいる」と考えると、この臓器移植医療が非常に尊いものであると改

めて実感する大きなきつかけとなりました。そして、2025年現在、当院では約5年間で6例もの脳死下臓器提供を実施してまいりました。

臓器提供いただいた全ての患者様に、それぞれ歩んできた大切なストーリーがございませう。私たちはその想いを汲んで、その時、そのご家族に合ったケアを提供する事を第一に考え、これまで取り組んでまいりました。

その都度、私たちはご家族の想いに触れながら、多くの学びを得て、次の症例で活かしています。今後は、これまでの経験から得た知見や取組を実践するだけでなく、移植医療に取り組んでいる、あるいはこれから取り組まれる医療機関様に発信していけるよう努めていく次第でございます。

この度は、このような貴重な機会を賜り、感謝申し上げます。

末筆となりますが、今後臓器移植医療がより一層の発展することを祈念するとともに、私たちに多大なるご支援をくださる皆様に心より感謝を申し上げたいと思います。



腎不全患者の緩和ケアに感じること

医療法人生寿会 五条川リハビリテーション病院

病院長 島野 泰暢



「透析を止めた日」(堀川恵子著、講談社)

なる書籍が話題です。読書家の義父からの推薦で読んでみました。多発性嚢胞腎を原疾患とする透析患者さんが終末期にご苦労された顛末に対して大変お気の毒だと思いました。

しかしながら、都市部に暮らし、経済的にも人のご縁にも恵まれて、医療機関・治療内容を選択できたことは恵まれていたとも思いました。著者の立場としては様々なご希望とご不満があったであろうことは理解できますが、私個人としては、ラストPDへの理解や維持透析施設との関係性についてヘンテコなことが書かれている印象を持ちました。

この書籍をきっかけに「腎疾患を軸に医療の未来を拓く会」(上川陽子代表)という自

民党の勉強会が立ち上がり、2026年の診療報酬改定では透析中止の末期腎不全患者さんも緩和ケア病棟を利用することが可能になりそうです。ご存じのように、緩和ケア病棟の入院料算定対象は悪性腫瘍と後天性免疫不全症候群に限られています。末期腎不全患者さんにとって緩和ケア病棟を利用できることは朗報です。また、がんの終末期だけが特別視されている緩和ケア病棟のあり方の見直しは必要でしょう。しかし、総枠が決まっている診療報酬の中で透析に関する部分から緩和ケア病棟の費用が捻出されるとなると、技術料本体からの付け替えにより、技術料そのものが引き下げられ、ますます透析医療の質の担保が難しくなってしまうことにもなりかねません。本末転倒にならないことを祈るばかりです。

年々、透析患者さんの高齢化が進んでいます。高介護度化も進んでいます。ここ数十年来、診療報酬は下がる一方です。特定保険医

療材料の価格は上がる一方です。当然ながら収益は下がる一方です。設備の更新もままならず、施設の新築・増改築などは夢のまた夢です。見捨てられた透析医療における終末期の患者さんを緩和ケア病棟で救うというのは何だか皮肉な感じもします。

日本緩和医療学会、日本腎臓学会、日本透析医学会合同で、「腎不全患者のための緩和ケアガイドランス」が2025年9月に発行されました。苦痛からの解放は最も大切な医療の目的だと思います。このガイドランスを学ぶことで透析医療に携わる医療者が治療の場所に寄らず（緩和ケア病棟に限らず）、緩和ケアを実践することができるようになれば、これこそが患者さんにとって朗報となるのではないのでしょうか。私もこの原稿を書き終えたら、さっそく勉強しなくてはいいかもしれません。

地域包括ケアの推進に伴って多職種協働というキーワードをよく聞くようになりました。平たく言えば、チーム医療ということでしょうか。透析医療は元々チーム医療を行ってきました。医師・看護師・臨床工学技士・医療ソーシャルワーカー・事務系スタッフなどが参画するチームでなければ、良質な透析医療が提供できないのはご存じのとおりです。また、患者さんにとって、透析医療は生活の一部ともいえるものです。長期間通院される患者さんもチームの一員と言えるでしょう。日本の透析医療における長期予後の成績は世界に冠たるものです。チーム医療のみならず、患者さんとの協力関係の賜物だと思います。私たちは、顔を上げて胸を張ってよいのではないのでしょうか。

これから透析医療の末席で精一杯頑張っ

移植施設紹介

シリーズ ー第十六回ー

ていこうと思います。どこかでお会いした時は声かけてください。最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第二病院 腎臓病総合医療センター 移植内科・移植外科

日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第二病院

第二移植外科部長 鳴海 俊治



当院は1976年に腎移植を開始し、翌年には移植外科を設立。以来、全国有数の移植医療専門拠点として、2025年9月末までに生体腎移植2589例、献腎移植341例、臍腎同時移植を含む臍臓移植44例という実績を有しています。

現在、移植外科医7名、移植内科医3名、

国内留学レジデント2名、小児腎臓医3名、レシピエント移植コーディネーター2名が在籍し、腎移植・臍移植に特化した専門外来を毎日提供。生体腎移植は週2〜3例、年間100例以上実施し、今年度から女性泌尿器科専門医も加わり、よりきめ細やかな診療体制を構築しています。泌尿器科、肝胆膵外科、消化器外科、腎臓内科など多岐にわたる専門スタッフが密接に連携し、看護師、薬剤師、臨床検査技師、臨床工学技士、管理栄養士、ソーシャルワーカー、臨床心理士、医療秘書といった多職種チームで、患者さん一人

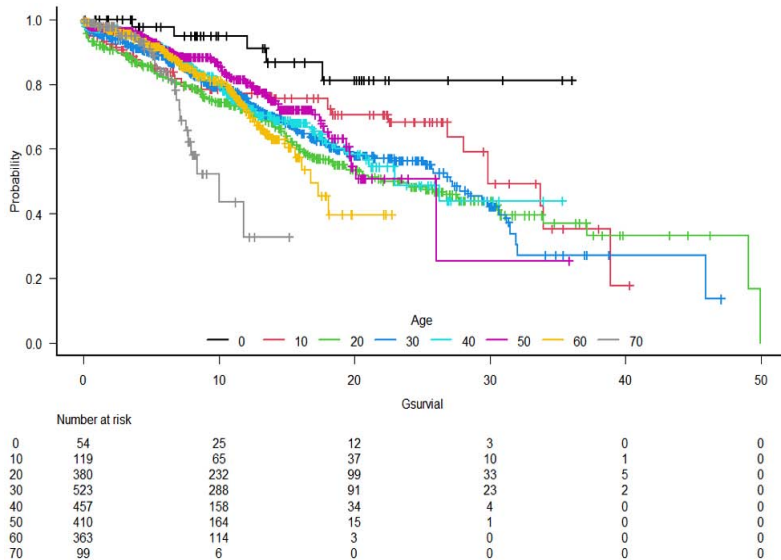
ひとりに寄り添った丁寧な診療を実践しています。

当院は以下の4つの中長期目標を掲げ、日々努力を重ねています。

1. リスクの高い症例にも安全で最高レベルの治療提供ができる移植チームの確立
移植腎生着率は1年99.2%、5年95.0%、10年88.4%と極めて良好です。70歳以上の高齢者レシピエント（約10%）でも1年97.8%、5年93.1%と高い生着率を維持（図参照）。中部・関西地域で唯一、体重10kg未満の低体重児への腎移植も実施し、1年100%、5年98%の生着率を誇ります。

A・B・O血液型不適合や抗ドナー抗体陽性といった免疫学的ハイリスク腎移植が全体の35%を占めるほか、他院で断られた高度動脈硬化症や心疾患合併症例にも安全な腎移植を提供。1型糖尿病による腎不全患者への脳死下臓同時移植も腓生着率1年97.6%、5年88.2%、10年64.3%と良好な成績を収めています。

移植後の患者サポートとして、2019年に開発したスマートフォンアプリ「移植生活」（現在は「カカリンク®」として全国展開）で、移植後の注意点や感染対策、災害時対応、ワクチン接種歴記録など、最新情報を発信し、患者さんの健康と命を守る情報提供に努めています。



移植時年齢	1Y	5Y	10Y	15Y	20Y
0-9	97.7	95	90	85	80
10-19	98.3	97.4	96.4	95.2	92.1
20-29	98.1	96.8	94	90.2	87.9
30-39	98.5	96.8	93.6	90.6	87.2
40-49	99.3	97.7	93.6	86.9	81
50-59	99	97.2	92	85.6	71.8
60-69	98.9	93.1	84	69.5	
70-	97.8	93.1	53.7		

2. 世界に発信できる臨床研究の推進

国内外の学会で積極的に成果を発表し、新しい治療法確立のため臨床試験にも参加。2021年から2025年の英文論文数は52編、合計インパクトファクターは173に達し、世界に貢献する臨床研究を推進しています。

3. 若手移植医の育成・教育

移植外科医と移植内科医が同一診療科に在籍し、専門医・指導医資格を持つ医師が移植に特化した医療を行う日本では稀なチーム体制を取っています。全国から若手医師が研修に訪れ、2008年以降、12名の外科医・泌尿器科医、24名の腎臓内科医が研修を受け、地域医療の発展に貢献しています。

4. 移植医療の普及・啓発

愛知県内外の腎臓内科スタッフとの勉強会や、ドナー慰霊祭、レシピエントとのウォーキングラリーなどを通じて、地域医療連携を強化し、移植医療への理解を深める活動を行っています。また、長年好評の「腎移植 あなたの疑問にすべて答えます」は2025年2月に第三版を出版し、移植に関する重要な情報源として活用されています。

今後も、患者さんが安心して腎移植・臓器移植を受けられる診療体制の確立を目指し、地域医療機関との連携を深めながら、さらなる改善に努めてまいります。



当院のスタッフ

おけはざまクリニックは2002年10月に30床の透析ベッドで一般外来併設の透析クリニックとして開院いたしました。開院後23年の間に透析ベッドも増床し、現在は50床＋感染症時の隔離の個室ベッド1床の合計51床にまで増床しております。

おけはざまクリニックは名古屋市長区と豊明市のちょうど境界にあり、名古屋市長区を中心に豊明市、大府市そして豊田市などからも透析に来院されておられます。送迎サービスはもちろん、車いすでの送迎が必要な方々も当院の送迎サービスにて通院いただけます。

当院周辺は緑区の住宅街で目の前には桶狭間古戦場公園もあり公園内には「義元首洗いの泉」もあり一説によると泉の中にくるくる



透析施設紹介

おけはざまクリニック

医療法人静心会おけはざまクリニック

院長 渡邊 達昭

回る桶があり、「桶廻る狭間」が「桶廻間」そして「桶狭間」と変化し定着したと言われる歴史感じる地域にございます。



外来では腎臓内科、糖尿病内科を中心に泌尿器科、皮膚科、心臓血管外科の医師にも診療にご協力いただいております。透析患者さんも透析中、もしくは透析開始前などに各科専門医に診察いただける体制が整っております。緊急時や専門的な治療が必要な場合は連携施設である藤田医科大学病院を中心に近隣の急性期病院との連携が整っており、また透析患者のシャントに問題が生じた際には当院でエコー検査などで判断し、治療介入が必要な場合はVAKリニックス愛知と連携しご対応いただいております。ご希望があれば当院関連施設の桶狭間病院藤田こころケアセンター（以下「桶狭間病院」）にてシャント対応する事も可能です。

桶狭間病院は精神科の病院ではありませんが、現在3名の内科医師が常勤しております。1名は腎臓内科の専門医です。21床の透析ベッドもあり、精神的なケアが必要な患者さん、さらに認知症、ADL低下、在宅での暮らしが不安な方、そして状況にもよりますが急性期病院での治療が落ち着き自宅に帰る前の準備の療養入院なども可能です。また桶狭間病院にはCT、SPECT、そして2026年中には3テスラのMRIも導入予定で、クリニックの外来診療で必要時や透析患者さんの緊急の画像検査なども対応する事が可能です。

また当院から徒歩5分以内に、医療対応有料老人ホームの「メディカルハウス満」やデイサービス施設の「グループホームゆう」、

「グループホームよろこび」などもあり、透析患者さんがご入所の際には当院に通院透析は可能です。リニックスへの外来通院、そして通院が難しくなった患者さんに対し訪問診療にて対応する事も可能です。

昨今は医療技術の向上により透析患者さんも長生きできる世の中になってまいりました。しかしながら高齢になるとそれなりに合併症、ADL低下、在宅での生活の不安などの問題が出てまいります。当院では外来にて各科の医師の協力のもと可能な限りの合併症に対応させていただき、必要時には藤田医科大学などの急性期病院に診療協力いただき、また治療が終了し、状態が安定したが自宅での生活に不安がある患者さん、ADLが低下し通院での透析が困難となった患者さん、在宅での生活困難、透析中の安静保持困難、などあらゆる状況に対応できるように桶狭間病院での入院、老人ホームの入所などの対応をさせていただき患者さんの一生にあらゆる方面よりご協力できるように努力させていただきます。

今後医療はさらに進化し、iPS細胞技術のさらなる進化、そして豚の腎臓移植が一般化し腎不全で透析医療が必要なくなる時代が来るかも知れません。それは来年、10年後、100年後、いつになるかわかりません。しかしながら医療は確実に日々進歩しております。今後のさらなる医療の進歩に後れを取らないように私たちも日々新しい知識の習得に

精進させていただく所存でございます。今後多くの患者さんに信頼される医療施設になれるようグループ全体で日々精進させていただきます。



透析施設紹介

阿久比クリニック

阿久比クリニック

院長 桐生 宏司



「阿久比クリニック」の開院は1994年5月8日。稲垣先生のお誕生日月に合わせた聞いています。

●開院、承継までの経緯

今回「透析施設紹介」という寄稿の機会を頂き心から感謝申し上げます。

私は1986年3月に名市大を卒業して、前田憲志先生の下で医師のスタートを切り、掛川市立総合病院で一年間のセミローテート研修（メジャー科を2〜3ヶ月毎に回る）を終え、当時名大分院内科で最も忙しいと言われていた「成田記念病院」腎臓内科に6年間籍を置き退局、馬渕茂樹氏に師事して上京し総合診療医へと舵を切り替えました。途中13年間の保健所医師（公衆衛生医）時代を経て2020年1月に前院長の稲垣豊先生が急病で倒れられたのを機に、「阿久比クリニック」を承継しました。

●重点を置いていること（Iさんとの出会い）

開院当時、知多半島には透析医療機関が少なく当院では99名もの透析患者さんをお世話したと聞きます。現在は昼間のみで18名です。当院では基本的な透析をやっているという意味では新しい透析の導入は遅れています。

私がこの6年間で重点を置いていることは「最期までお世話させて頂く」ことです。諸条件を抱える透析困難症例も積極的に引き受けています。Iさんは82歳男性。今年の1月に在宅で亡くなりました。患者会の会計を務めていました。昨年10月に脳出血のため転院。しかしそれまでの信頼関係で奥様が逐一御報告下さり、透析を止めて自宅に戻ると聞きました。翌日訪問して会話をするとIさん



は「いろいろなことを話せるのは先生だけだ。」と言われたので10日後に亡くなるまで日曜日を除いて毎日訪問しました。Iさんは病気のデパート状態でしたが、最後は子どもたちにすべてを托して家族の皆に囲まれて亡くなったそうです。

●『抜苦与楽』の道を歩んで行きます。

前院長の稲垣豊先生が31年前にこの地で当院を始めるときに、私の人生の師でもある高橋佳子氏から直筆のお手紙を受け取っています。そこには「これよりも『抜苦与楽』の道を歩んでゆけますように」と書かれています。

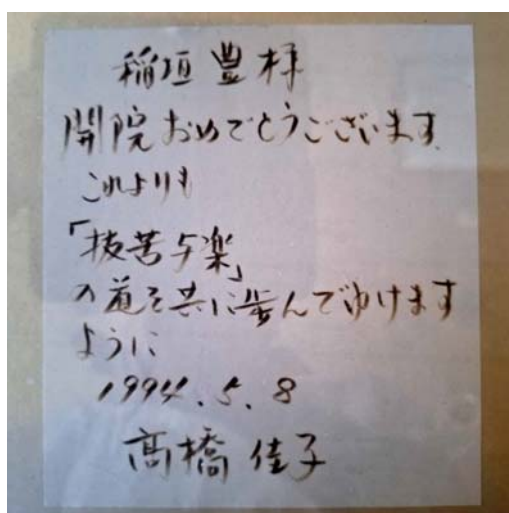
前院長は、私に医院を承継する5年前までその手紙を額に入れて院長室向かいの和室の床の間に大切に置いて、それを日々の指針として信望のある医院として経営されて来ました。共通の師である高橋氏の額はそのまま残しています。そして外来診療においても、通院透析センターとしても、今後の地域の医療福祉の社会的資源へと発展してゆく上でも大切に守ってゆきたい指針です。特に長年隔日に通院しながらも目を重ねる度に様々な透析合併症を発症して不自由な身体で人生を紡がれてゆく透析患者さんへの配慮は最後まで忘れたくありません。

様々な役割を担っている職員と一層の精進を積んで参りたいと想います。

●読売新聞11/6より「透析中止患者 緩和ケアの対象」

最後に、読売新聞11月6日に『透析中止患者 緩和ケアの対象』の見出しで掲載され「人工透析を中止した末期の腎不全患者について、厚生労働省は5日の中央社会保険医療協議会に、緩和ケア病棟の対象に加える方針を示した。緩和ケアは、病気による心身の苦痛を和らげるもので、がん患者を中心に行われている。厚生労働省は、透析を中止した末期の腎不全患者について、末期がん患者と同様に身体機能が急速に悪化し、呼吸困難や痛みな

どの苦痛があるとして、緩和ケア充実の必要性があると説明した。」とあります。また10月10日には『腎不全患者に緩和ケア 厚労省方針 がん以外に拡大視野』の見出しで「厚生労働省は、病院や自宅にいる腎不全患者の緩和ケアを進められるよう医療従事者向けの研修を行う。自宅や介護施設で緩和ケアを受けやすくする…」とあります。Iさんの症例を経験して、そのような医療が早く実現することを、自身も実践し応援しつつ期待したいと思います。



◆ トピックス ◆

小児CKD（慢性腎臓病）対策講習会

7月3日（木）にウインクあいち会議室で開催し、小中学校の養護教諭や医療機関従事者など41名がご参加されました。



看護師、訪問看護師のための腹膜透析セミナー

7月27日（日）にウインクあいち会議室で開催し、会場が溢れるほど（参加者162人）の盛況でした。



臓器移植普及啓発活動

臓器移植普及啓発を図るためのパネル展示を10月10日（金）から11月12日（水）まで愛知県図書館の1階エントランスYotteko（ヨッテコ）で行いました。



グリーンリボンウォーク

腎臓移植を受け、現在社会復帰して通常生活を営んでいる移植者の方々の体力向上と相互の親睦を図るとともに、一般の方々には臓器移植についての理解と協力を深めていただくことを目的として11月9日（日）に名古屋城周辺で開催しました。

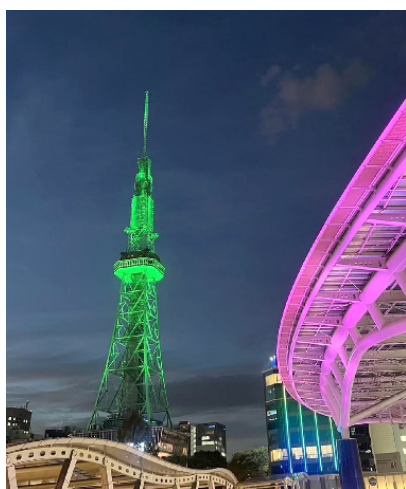
あいにくの雨でしたが、50名近くの方々にご参加いただき、無事に終える事ができました。ご参加いただいた皆様、雨の中お疲れ様でした！ ありがとうございます。



グリーンライトアップ

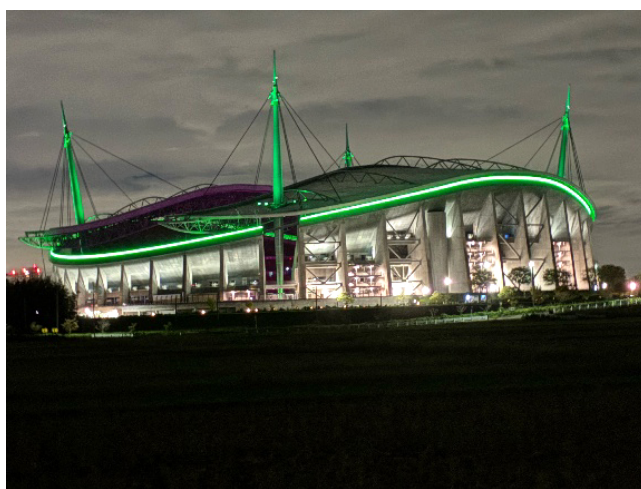
グリーンライトアップとは、グリーンリボンキャンペーンの一環として、移植医療のシンボルカラーであるグリーンにライトアップすることを通じて、臓器移植医療への理解が広がることを期待する取組です。

10月の「臓器移植普及推進月間」に合わせて、県内の著名なランドマークである名古屋市の「中部電力MIRAI TOWER」と豊田市の「豊田スタジアム」の2か所をグリーンライトアップしました。



中部電力 MIRAI TOWER

10月11日～16日



豊田スタジアム

10月14日～23日

編集後記

巻頭言では、大島伸一会長が「変化の予兆」と題し、9月に周知された臓器のあつせん業務体制を大きく変更する厚生労働省の方針について触れています。1995年、国はそれまで愛知県など地方の努力を十分に評価しないまま、トップダウンで唯一のあつせん組織を東京に設立しました。しかし今回、再び地方組織によるあつせんを認めたことについて、大島会長はその心情はさておき、臓器提供数を増やし、臓器不全に苦しむ患者が移植によって救われる機会を広げるためには、地方関係者の協力が不可欠であると述べられています。重みのある言葉です。

厚生労働大臣による臓器移植対策推進功労者への感謝状は、今年は個人と施設の双方に贈呈されました。

日赤愛知医療センター名古屋第二病院（以下、日赤名古屋第二病院）第二移植外科部長の鳴海俊治先生は、国内外で培われた豊富な経験をもとに、愛知県内で最も多く移植を行う現病院に赴任され、腎移植のみならず、留学先での経験を活かし、臓器同時移植の導入にも尽力されたことが評価され、今回の受賞に至ったものです。これを機に、さらなる活躍を期待しています。

藤田医科大学ばんだね病院は、臓器提供のためのチームを立ち上げ、2021年に初めて脳死下での臓器提供を実現しました。同院は移植を実施していないにもかかわらず、その後5年間で6例の提供を継続している点が高く評価されました。今後さらなる提供数の増加が期待されます。

五条川リハビリテーション病院の島野泰暢先生は、「腎不全患者の緩和ケアに感じること」と題し、終末期腎不全患者に対する医療選択と、その費用に関する問題を論じておられます。私も早速「腎不全患者のための緩和ケアガイドライン」を入手し、この領域の課題について学び始めたところです。

移植施設紹介では、日赤名古屋第二病院腎臓病総合医療センターの多職種による診療体制と、その実績について鳴海先生からご報告いただきました。同院で行われている多岐にわたる腎移植と、関連する臓器同時移植の成績も示していただきました。

(T・K)

